

連続と

やまがた旧家・名家探訪

▶28

山形市旅籠町の老舗仏壇仏具店「長門屋」の5代目・笹林陽子さん(58)は、3代目山口浩平の長女として生まれた。東京の大学に行くために実家を離れ、同じ会社勤めしていた笹林修さんと結婚。修さんの地元である北海道に転勤となる。ある時修さんは、「転勤の多い会社なのでいずれ家族一緒に過ごせなくなる。それよりは山形に皆で行って家を手伝った方がいいのでは」と急に提案した。陽子さんは不安を抱えながらも2002年に家族で山形に戻った。

当時の長門屋は、世の中ですでにパソコンが普及していたにもかかわらず、紙の帳簿で売り上げを管理しているような旧態依然とした状況であった。「東京に本社がある会社では当たり前だが、通じない世界。これは改革しないと」と、修さんは改革に着手。07年には4代目に就任した。

この間、山形仏壇を巡る状況も変化してきた。流通の変化で

仏壇仏具店営む長門屋「山口家」①

さまざまな産地の仏壇が扱われるようになり、県外の企業も進出してきた。仏壇にまつわる考え方も変化してくる。「物だけをいっぱい並べているだけの時代ではなく、商談でも、昔はずっと守っていくものだから一族の当主が決めてい

たが、今では奥さんが主導の家も多い。核家族化したことで、代々継いでいくことも前提ではなくなってきた」。長門屋でも、時代の変化に応じて、仏壇の修復やリメイクを提案するようになった。

14年には陽子さんが4代目に就任する。就任と相前後して、山形県中小企業家同友会の「経営指針をつくる会」を受講し、現場を切り盛りしてきた母や社員に歴史や思いを聞きつつ、経営理念を作成した。5代目は「仏壇は物だけでなく、物ではない部分

が重なっている。仏壇が家に来ると、毎日お参りするようになって、気持ちも穏やかになったという手紙もいただいた。物だけ物ではない、家具とも違うものを必要だと感じる人が来る場所がここなんだ、ということがだんだん分かってきた」と語る。

敷地全体を「トキ」の場に



敷地内の「ひなた蔵」を活用して、雛人形の展示会など一般開放している(長門屋提供)

かつては漆器の保管場所として使用していた「ひなた蔵」

これまで漆器の保管場所として使用されてきたひなた蔵も、写経の会や雛人形の展示会で一般に開放するようになった。「お雛さまを前にすると思いの屏が開いたり、お店の方にも来てくれるようになったり、いろいろな縁が思わぬところからつながっていく」。5代目は長門屋の敷地全体を、「モノ」(商品の販売)や「コト」(修復・リメイク)だけではなく、敷地内の空間を訪れて商品にまつわることを体験してもらったり、その裏側や歴史を知ってもらう、「トキ」の場にすることを展望している。初代・山口長蔵が商売の縁で作り上げた空間は、さらなる縁を紡ぐ世界へと成長しつつあるようだ。

(小幡圭祐・山形大人文社会科学部准教授)